

# ベトナムの大学における古典（漢喃文献）教育について

——前近代から現代に至るベトナムにおける漢文教育の概括——

グエン・ティ・オワイン

## はじめに

ベトナムは中国大陸と近接する位置にあるため、早くから漢字・漢文と接触し、日本や朝鮮（韓国を含む）と同様、ベトナム人は表記文字として漢字を使用した。10世紀に中国から独立した後も、漢字は民族文化の保存と発展に有効な記録手段として使用され続けた。従って、漢字教育は急迫かつ切実な要求であったのである。やがてフランスの植民地になると、約800年続いた科挙制度は廃止された。それに伴ってベトナム語正書法である、表音文字としてのローマ字が普及し、漢字と喃字の地位を圧倒したが、民族文学の中に漢文文学が保存されているため、現在に至るまで漢文教育が維持されている。

本報告では、ベトナムにおける漢文教育を封建王朝期、フランス植民地期、独立達成後、の三つの時期に分けて概括する。具体的には、漢喃研究所所蔵の資料と、現在ベトナムの大学で使用されている資料に基づき、官僚を選抜するために行った科挙制度や、民衆が子弟のために造った学堂、教科書、試験制度、待遇制度に焦点をあてることによって、封建王朝における漢文教育の実態を明らかにし、加えて、現在のベトナムの大学における漢文教育についても紹介したい。

## 第一章：1945年までのベトナムの漢文教育の歴史について

長期間、ベトナムは中国の漢文教育の影響を受けた。前漢末から後漢初めにかけて、有能な漢人官僚が郡の太守となってベトナムに赴いたが、なかでも、後漢の士燮（山東出身）は太守となって交州を支配するとともに、ベトナム人に中国の文化や漢字を教えた。ベトナムの漢字音はおそらくこの頃に移植されたのであろう。

唐代には、中国の官吏がベトナムに赴くとともに、インドへの途上にある唐の仏僧が交州に滞在したこともあって仏教が伝わった。そもそも漢字は太守の支配手段として使用されたものであるが、ベトナムを自立自強にするための手段としても採用されるようになった。また、中国の官人をまねて漢語を学ぶ者が生まれた。例えば姜公輔、姜公復兄弟のように、科挙に及第し、初めてベトナム出身でありながら唐朝の進士となる者も現れたのである。また、仏教が伝わったことによって漢字を使用する僧侶も増加し、僧侶が政治に参画するようにもなった。寺院は仏典を複写する以外に漢文教育の場ともなったのである。

## 1. ベトナム歴代の漢文教育について

### 李朝の漢文教育

漢文文化は中国の直接支配の時期に移植されたのであるが、この段階では十分に根付くには至らなかった。李王朝（1010 - 1124）は中国から独立した後も引き続き表記文字として漢字を使用した。また、強大な権力を求めて、君主への権力集中を強化するためには儒教に頼らなければならなかった。ゆえに、漢文教育と科挙試験を実施するための条件を整えたのである。具体例としてはまず1070年に文廟を建てたことが挙げられる。文廟では孔子・周公・四配・七十二先賢の像を作って四季ごとに祀り、皇太子を学習させた（「秋八月、脩文廟塑孔子、周公及四配像、畫七十二賢像、四時享祀。皇太子臨學。」）（『大越史記全書』、卷三、李紀、5b頁）。また1075年には初めて明経博士の試験と儒教に基づく三場の試験が行われるようになった（「乙卯四年宋熙寧八年、春三月詔選明経博學及試儒學三場黎文盛中選進侍帝學」）（『大越史記全書』）。1086年、1152年、1185年、1195年の四回、不定期ながらも「殿試」「太学生試」「三教試」といった科挙試験が行われている。

ところで、試験制度とはいかなるものであったのか。現在、『大越史記全書』以外に依るべき史料はほとんど存在しないが、科挙に及第した人は必ず四書五経に精通した人材であったため、おそらく中華の経典（四書五経）が漢文教育と科挙のテキストとなったと考えられる。このように、太祖—太宗—聖宗—仁宗の四代にわたって、科挙制度の採用はほぼ成功したのである。

## 陳朝の漢文教育

李朝を継いだ陳朝（1225 - 1400）は、国家の自主独立を維持し、また外的な侵略に対抗したため、ベトナム民族意識が高かった時代といえる。この頃、漢文文化の吸収が最も盛んに行われた。この点は朝鮮と同じであるが、ベトナム人は北方（中国）への根づよい対抗意識を忘れなかった。陳朝は李朝以来の官人養成の方法を改善し、政治制度を定めた。1232年に陳太宗は「太学生」を採用するために科挙を再開、1247年には科挙試験が行われ、優等な及第者を状元・榜眼・探花（三魁）と分類する細かな方式を定めた。百年以上の間に、陳朝は16回の科挙試験を行ったことが確認できる。また1256年には首都・昇龍以外の各地方の人材の登用を奨励するため、「京状元」と「賽状元」とに分けて実施するようになった。

1253年には「国学院」を設けて全国の儒者を招き（貴族の子弟以外の者も入れる）、四書五経を教えた。1281年には「国学院」以外にも天長府の学場を設けて、地方の生徒を学習させた。皇族や著名な官吏によって立てられた学校でも漢文が学ばれるようになったのである。史料には「朱文安は沼の中の丘に学堂を設けて教えた。遠近から多くの生徒が勉強しに来た」（『歴朝憲章類誌』192頁）とある。国家的な学堂以外にも村落の私塾が建てられて、科挙試験に応ずべき優秀な生徒を推薦した。

ここで李朝・陳朝の科挙試験の制度について触れておきたい。試験は、第一段階の「暗記」、第二段階の「経疑」「経義」「詩賦」、第三段階の「制」「詔」「表」、第四段階の「対策」、の順序で行われる。1349年、元朝の科挙試験をまねた「四場文体」の制度が採用されるようになると、「暗記」は廃止された。

国家的な学堂の場合、学堂の建設費、教科書や燃料などの費用は、国家から下賜された田地での農産物によって得た利益が充てられた。また、生徒にかかる費用については、村落の寺院や道館も学校となって以降、費用の一部は政権が負担するといった優遇措置がとられた。1397年には初めて、路官と督学という教育官職が設置された。

短命ではあったが、陳朝を継いだ胡朝（1400 - 1407）においても科挙が重視された。七年間に2回の科挙試験を行った。合格者は13人、その中には十五世紀の

文化人として著名な阮廌も含まれていた。

### 黎・莫・鄭朝の漢文教育

十年にわたる戦いに勝利して明軍を撃退した黎朝（1428 - 1527）は、1428年、官吏を選抜するために科挙試験を再開した。翌年、全国すべての生徒のために明経試験を行ったことを皮切りに、「国子監」の再開（1428年から1527年にかけて）や、全国に「路学」を建てるなど、すべての者が官途につく道を開いた。さらに1462年には郷試の規定を定め、1463年以降は三年に一度、会試を行うことになった。また合格した者を進士及第、進士出身、同進士出身と称して名前を碑文に刻み、榮譽をあたえる風習を取り入れた。その際、喪に服する生徒と歌舞団の子供、あるいは反逆に関係ある者は受験資格の対象から外した。

郷試においては依然として、「暗記」を受験させた。最初の段階において劣悪な生徒を取り除くためである。その上で第一段階は四書五経の中、五科目の受験、第二段階は「制」「詔」「表」の評論、第三段階は唐律の漢詩、300字の文章作成、第四段階は経典、あるいは当時の社会問題について1000字の文章作成を課した（『大越史記全書』巻12、黎紀、10a頁）。なお受験の際、関連資料を持ち込んだり、本人ではなく代わりの人間が受験するなどの試験規定に違反した場合は拘束され、三年間の労役が課された（『歴朝憲章類誌』、22頁）。

その後、黎氏に代わって莫登庸の王朝となった。1527年から1592年にわたる莫登庸の王朝は、漢文教育と試験制度に大きな影響を与えた。1544年に「制科」という名で開始された試験は、三年に一度行われた。また京都に孔子廟が再建されて儒教的な儀礼が行われるとともに、地方での学習奨励のため、文址が設けられて孔子と賢人が祀られた。

莫朝を滅ぼした鄭氏（1600 - 1778）の王朝においても依然として儒教を思想的基礎とした。儒教の経典は主に漢文教育と科挙試験の内容となった。鄭主は昔から好まれた「尋章摘句」の答案を防ぐため、洪徳時代（1470 - 1497）の文体を使用させた。この措置は受験者の創造性を重視するためである。また1731年には五経を木版印刷し、流布させることが命令された。

漢文教育は郷学を通じて民間に浸透した。それは毎年科挙試験（郷試）を受ける人数が増加していることから分かる。例えば、1483年は4400人であったが、1514年には5700人に達した。しかし、郷試に合格した人数は大変少なく、全体の10%に過ぎない。統計によると、1554年から1778年にかけて都合73回の科挙が行われ、及第した人数は774人である。黎朝も末期に至ると科挙の質が低下して国家の利益を損うようになった。生徒以外にも農家、商人などが三貫を支払って郷試が受けられるようになったのは、その一例である。しかし、実際に生徒以外の人材が選択されたのは全体の10分の1に過ぎなかった（『歴朝憲章類誌』、31頁）。

### 西山朝の漢文教育

西山朝（1778 - 1802）は短期間であるが、他の王朝と同様、漢文教育と科挙で人材を選択するなど、従来の在り方を重視した。光中皇帝は黎朝末期の漢文教育の諸問題を解決するため、即位後ただちに教育制度を改良し、「立学詔」を出して「三貫生徒」の規定を廃止した（『韓閣英華』A.291）。また地方の漢文教育を発展させるため、初めて「社教」という教育管理の職官を設置した。14年という短い西山朝にあって、郷試を実施したのは1回のみであった。

### 阮朝の漢文教育

阮朝（1802 - 1945）に入ると、一層、儒学の普及に努め、1803年には順化に「国学」が建てられるなど、漢字文化はピークに達した。また課士法の制定などの儒士への優遇策により、漢字教育が最も盛んな時期であると言える。これは儒学を発展させるために他ならない。1820年には「国子監」が設けられ、1823年には府県に学堂が建てられ、1824年には営、鎮にも学校が設けられた。

1807年には北部で郷試を行い、1825年には全国の科挙試験が実施されるようになった。進士の会試は1822年に行われるようになった。また、会試以外にも「恩科」と「制科博士」がおかれた。

阮朝において、会試を開始した1822年から1919年の最後の会試まで、都合39回の会試が行われ、558人の進士を得た。（写真1・2・3・4）

### フランスの漢文教育

20世紀初頭にはフランス植民地行政の諸制度が整備され、フランス人アンナン



理事官の干渉が拡大した。フランス政権は彼らの支配政策を保持し、また植民地経営に有用な現地人官を養成するために、諸制度の整備に着手した。サロー（Sarraut Albert）総督によって教育改革令が出され、それによって各種学校がつくられ、更に1917年の教育令によってフランス式の学校制度が導入されたのはその一例である（写真5）。なお、修学期間は初等6年、中等5年の11年制となり、教育言語はフランス語、教育内容はフランスの地理と歴史であった。また、漢字の代わりにアルファベット化されたクオックグー（国語）を用いて、ベトナムでの教育の普及に努めたが、ベトナムの教育から漢字を取り除くことはできないため、フランス政権は漢文教育に対する方針を転換、引き続き漢字漢文の教育制度が実施された。

この時期の漢文教育の制度についてであるが、小学、初等小学における漢字の学習は義務教育ではなかった。学校が漢字教育を要望する場合には、生徒の世帯主や社と協議する必要があった。漢字教育とは毎週木曜日に漢字を教えることであり、教え方については学制総審査官が定めた。初等学校における漢字の学習は最後の二年に実施された。また、毎年漢文教育の事情を東洋総督に報告しなければならなかった。

仏越中学校において、国語と漢文を教える時間は一週間にわずか3時間であった。師範班（4年間）の教科書は、ベトナム人儒者によって書かれた『越史新約』『新国文』『幼学漢字新書』などを使用した。4年間で、学生を1、2、3、4、5、6の班に分け、最初は3、4、5、6班の学生に漢文の文法と言葉を勉強させ、次にテキストを読み、意義を把握させる。1、2班の段階では短い漢文をベトナム語に翻訳し、テキストの内容を評論させた。また漢文で文章を書くこともこの時間に教えられた。その他、『越史新約』や『中学越史』など、北史（中国の歴史）と南史（ベトナムの歴史）を科目として勉強させた。5班の学生には『公餘捷記』や『伝奇漫録』など、ベトナム人によって漢文で書かれた作品を勉強させ、3、4、5班の学生には『詩経』や『論語』、唐詩とベトナムの阮廌によって書かれた『抑齋詩集』を勉強させた。

## 2. 漢文教育の教科書について

科挙制度、学堂、優遇政策などの問題と同様に、教科書の問題も重視しなくてはならない。テキストは二つに大別できる。一つは『三字経』『明心保鑑』『四書大全』

『五経』『史記』『漢書』『唐詩』など、中国から輸入したものであり、もう一つは阮輝瑩の『初學指南』、范廷琥の『日用常談』、裴輝碧の『五経節要』、黎文語の『論語節要』、段展の『小學四書節略』など、ベトナム人が編纂したものである。これらの教科書は主に小学校と受験の二つを対象にして編纂されたものである。

漢喃研究所が所蔵しているベトナム人編纂の教科書を考察してみると、三つの種類がある。第一は阮輝瑩の『初學指南』のように、漢字で編纂されたものであり、第二は嗣徳帝の『自学聖製解議歌』、段展の『小學四書節略』など漢字とチューノム（字喃）で編纂されたものであり、第三は『漢字自学』、『三千字解音』などの漢字、チューノム、クオックグーで編纂されたものである。

特に注意すべきは1773年に阮輝瑩によって編纂された『初學指南』である。阮輝瑩は村落の学校、府縣の学堂、京都の国子監などで教えたため、講義とテキストの編纂についての経験をもっていた。33179字で書かれた『初學指南』（写真6）は初級者に漢字を教える教員のために編纂された教科書である。漢字の初級クラスの生徒を教える教師にとって、この本は孔子の祭り方、漢字の書き方、漢詩の作り方、資料の準備方法、試験問題の点数や評価方法などが示されている、適切かつ標準的なテキストであり、漢字の教育方法を容易に把握することができるテキストである。阮輝瑩によれば、教育資料の選択の仕方は必ず三つあるという。一つは物事を易しく見る、二つは漢字を易しく知る、三つは易しく読む（「文章当三易、易見事一也、易識字二也、易誦讀三也」）である。彼は昔の人々がよく採用した朱興嗣の『千字文』を、短い文句や調和的な音韻が示されていることから、教科書として使用するべきだとした。

また漢字の教え方、なかでも書き方については「生徒に大きく書かせるべきである」という。生徒が作成した文章を添削にあたっては、生徒の文章を少し残し、全て取り去らないようにするといった工夫を主張した。

アルファベット化されたクオックグー（国語）が採用されたようになってからは、漢字、漢越語と国語が混合した教科書も現れた。ここで紹介したいのは、保大七年壬申（1932年）に成立した『啓童説約』（写真7）である。『啓童説約』は朱玉芝によって国語に翻訳された教科書で、漢字一字ごとにベトナム語の「意味」が付けら

れており、その数は450組に及び、1832字に相当する。本書は漢字からベトナム語に翻訳されたものと言われているが、漢字と字喃とを対照すると、日本の漢文訓読のように、漢字の意味に基づいて、一句ごとにベトナム語をあてて読んでいることがわかる。また、下表「\*」で示したように、一語句の中に漢字の一字に漢越語と固有ベトナム語を付し、「\*\*」のように一字の漢字の意味をベトナム語で表現できない場合は、新しい言葉を加え、「2, 2,」のように行われる。これは「\*\*\*」のように一句ごとにベトナム語をあてて読んでいるのではなく、翻訳で読んでいる。

漢字（原文）	漢越語	ベトナム語（字喃）
一昼一夜、九十六刻 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 (3b)	Nhất trú nhất dạ, cửu thập lục khắc 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8	Một ngày một đêm, chín mươi sáu khắc 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 (*)
天時有四、春、夏、秋、冬 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 (2a)	Thiên thời hữu tứ, xuân, hạ, thu, đông 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8	Trời thời có bốn, mùa xuân, mùa hạ, mùa thu, mùa đông 1, 2, 3, 4, 55, 66, 77, 88 (**)
我越沿海四至提封 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 (7b) (1*)	Ngã Việt duyên hải, tứ chí đề phong 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8	Ta nước Việt bên bể, bốn bề bờ cõi 1, 22, 3, 4, (5) (6) (7) (8) (***)

(1\*) 注：

「四至」は四周の意味である。

「提封」は地図、境域の意味である。

漢字を学習するためには辞書が不可欠であるが、辞書は漢文教育に重要な役割を果たしている。例えば范廷琥（1769～1839）の『日用常談』は、漢喃文献の書物の中でも、辞書としてしばしば再刊されるものである。『日用常談』では漢文一文ごとにベトナム語の「訳文」が付けられており、その数は2600組に及ぶ。なお「訓点」のような符号は存在しない。

また『三千字』は漢字一字ごとに字喃の註が付けられており、漢字学習用の教科書として使用されたものである。『三千字』について、岩月純一氏は「一八世紀末に編纂された初歩の漢文教科書（二〇世紀初頭の刊本）であるが、これを暗記するときには、字形を見ながらその字音と「訓」を続けて発音してゆく。すなわち、冒頭の「天、地、拳、存、子、孫、六、三、家、国」という句は、"Thiên trời, Địa đất,



Cử cát, Tồn còn, Tử con, Tôn cháu, Lục sáu, Tam ba, Gia nhà, Quốc nước" (字音のあとの太字下線部が「訓」) というフレーズを何度も発音させられることによって脳裏にたたき込まれるのである。」と紹介している(『訓読論』所収「ベトナムの訓読と日本の訓読—漢文文化圏の多様性」勉誠出版、2008年、105 - 119頁を参照)。

ここで、漢字の学習におけるチューノム(字喃)の役割を述べたい。チューノムは日本の国字のように、漢字の製字原理により、形声法を用いて造成したものである。似た発音を持つ旁を音符とし、これに独自の扁を組み合わせてチューノムを造成する(そのチューノムは「漢字」とは異なる「ベトナム語」の文字として使用される)。例えば、"núi"というチューノムは、漢字の「山」と似た発音「内」を組み合わせた喃字である。このような文字は漢字で表現できない多くのベトナム語をあらわすものとして生じた。手順は日本の訓読のように、漢字一字ごとに字喃を当てて読み、また、ベトナム語の文法で読む。しかし、日本語とは異なり、中国語と似ているベトナム語は単音節の言語であり、しかも文法も似ている点が多いため、漢文を返読する必要がない。当然、訓点符号も不要である。これについて、筆者は台湾大学において「ベトナムの漢文訓読とその資料」と題して発表した。その論文は『日本の江戸時代における日本漢文学の諸傾向』に掲載されている(2009年、台大出版中心より刊行)。

日本の「訓」は日本における漢字の訓み方を固定化したが、ベトナムの「訓」は「翻訳言葉」と認められたにもかかわらず、「進 lèn」「下 xuông」「静 lạng」「積 chúra」「遊 chôi」「老 già」「理 lĩ」などのように、漢字とベトナム語の「訓」を組み合わせたものである。従って現在のベトナム語彙の中にも、ベトナム語固有のものが痕跡としてわずかに止まっている。

ここでまとめると、李朝(李仁宗)が1075年に科挙を開始し中国的政治体制を採って以降、官人の資格を得るには漢文が不可欠の教養となった。陳朝(13世紀)の末には郷試—会試—廷試の三段階式の科挙試験が行われるようになり、盛衰はあったものの、20世紀の初め(1919年)までベトナムの民族文化を発展させることと儒学的知識を養成するため、科挙が実施され続けた。ベトナム官僚の心得として有益であった宋儒学(朱子学)が、ベトナムでの教育の中心となったため、進取の

気に乏しい保守的な官僚が生まれ、ベトナムの植民地化を許すこととなった。1919年、科挙はフランス植民地政府により廃止され、クオックゲーは正式な表記文字として使用されるようになったが、漢文の教育は続いて行われた。漢文の教科書は漢字を教えるために使われるだけでなく、社会の中に士大夫層を生じさせることにもなった。

## 第二章：20世紀半から現在までの大学と教育所における漢文教育について

ベトナムではクオックゲー（国語）が漢字の代わりに使用されるようになったため、人々と漢字によって継承されてきた伝統文化との間に間隙が生まれた。漢字と喃字で書かれたベトナム民族成文遺産書庫の文献と地方における歴史遺跡、亭や寺院の対聯、衝立、神蹟、碑文、鐘、磬などの歴史的遺産は、クオックゲーを学習した人々からかけ離れたものになってしまった。残念ながら、漢字と字喃を勉強していない社会科学研究者が、直接的に漢字と字喃で書かれたテキストを利用することができないのは当然のことである。

### 1. 大学における漢文教育について（ハノイ人文社会科学大学における漢文教育を中心に）

漢文専攻の学士を緊急に養成しなくてはならないという危機的状況を解決するため、1972年と1973年に総合大学（現在、人文社会科学大学）が正式に文学学科、漢喃部門の学生を募集するようになった。その後、隔年で募集していたが、応募する学生数は10人ぐらいであり、教授もわずか4人しかいなかった。しかし近年、毎年漢喃学部の学生を応募するようになった。選択する学生数も増加しており、現在では採用される学生数は30人に達し、教員数も12人となっている（写真8）。

現在の漢喃部門の授業時間割について

漢喃学部の学生は二つの見識分野の授業を履修する。

一つはマルクス・レーニン主義、科学的な社会科学主義、ベトナム共産党史、ホーチミン主席の思想、国防教育、体育、コンピュータ、外国語、社会統計、環境と発展といった、科目の概要教育である。

もう一つは論理学概要、社会学概要、ベトナムの文化基礎、ベトナムの歴史過程、

言語学概論、ベトナム語音、ベトナム語彙、ベトナム語の文法、文学理論、近代までの文学、古代から唐代までの中国文学という科目の専門教育である。

具体的授業の科目は以下の通りである。

ア. 漢文の基礎科目の内容については、授業で漢字と漢文の知識を身につけさせる。その科目の通り、中国とベトナムの漢文テキストを理解するために最小限の漢字数を覚えさせる。

イ. 中国の漢文については、四書五経、諸子散文などの古典漢文、司馬遷の史記、韓愈、柳宗元、蘇軾、蘇轍、蘇洵、欧陽脩といった唐代などの歴代漢文を勉強させる。

四書の教科書は教員が準備し、また五経については主に孔穎達の「五経正義」が使用されている。内訳は周易、尚書、毛詩、礼記、春秋左氏伝であるが、これらは伝統的な科挙教育の官方資料としてよく使用されたものである。四書五経について、具体的には以下の通りである。

- \* 四書は標準として朱子の注を使用する。
- \* 易経は程頤の「集伝」と朱熹の「本義」による。
- \* 書経は蔡沈の「集伝」による。
- \* 詩経は朱熹の「集伝」による。
- \* 礼経は陳浩の「集説」による。
- \* 春秋は胡安国（宋人）の「伝」による。

このようなシステムは中国の明朝と清朝、ベトナムの黎朝と阮朝の科挙教育を標準として採用された。

ウ. ベトナムの漢文科目は10世紀以前の漢文、10 - 15世紀の漢文（李朝・陳朝）、15 - 18世紀の漢文（黎氏・阮氏）、19世紀の漢文（阮朝）とホーチミンの漢文からなっている。

エ. 字喃と字喃テキストの科目は字喃入門、歴代の字喃などからなっている。

オ. 漢字文字学、字喃文字学、漢字音韻、科挙教育、儒家経典歴史、東洋古典の文学理論、文言の文法などの科目は、知識をシステム化するための役割を果たしており、漢喃分野についての知識を身につけるためにもなる。

大学における漢喃部門の教育は210単位となり（1学程は15時間に相当）、概要教育に71単位、専門教育に139単位が分配される。130の学程の中、漢喃教育は109単位である。

以上、主に人文社会科学大学の文学学科の漢喃部門での漢文教育について述べた。如上の漢文教育は漢喃研究所などの研究所とは異なるが、漢喃研究所において、学部生に対しては全体的な教育を行うことに重点を置き、卒業生を研究所や他の教育機関の研究上の要求に合わせて補完している。

## 2. 漢喃部門での修士課程

1998年、ベトナムの文部省は漢喃部門の修士課程の実施を決定した。現在に至るまで、修士課程は12回実施され、修士の人数は200人近くである。漢喃部門の修士課程は、漢喃部門を卒業した大学士と文学、言語、外国語、文化学、新聞・雑誌、人類学などの漢喃と近い分野の大学士をその対象としている。漢喃学部の修士課程の大学士は二つの見識分野の授業を履修する。

一つは一般的な見識分野：哲学、外国語、漢喃の科目

二つは基礎的な分野：

ア. 必修科目は、漢喃学に接近する方法、文言と文言文法、喃字とベトナム語の歴史、論語、孟子、周易、礼経、春秋・左伝、百家諸子の精選、李・陳朝の漢文、黎・西山の漢文という科目を含む。

イ. 選択科目は、阮朝・近代の漢文、ベトナム科挙文章と科挙制度、中国思想の歴史、ベトナム思想の歴史、ベトナム中世・近世文学の総括、中国古典文学の総括、ベトナム文化の歴史、漢喃文献の本文学、漢喃テキスト講読、漢字・喃字の文字学史の諸問題、漢越音の読み方という科目を含む。

大学で履修する漢喃科目に比較すると、修士課程の科目は中国とベトナムの古典と漢文テキストの漢文知識を全面的に高めているといえる。また、漢喃文献を収集、理解するなどの面に接近し、研究する方法を高めているとともに、漢喃文献における歴史、文化の価値を明らかにしている。

特に教科書と参考資料は経験ある研究者と教員によって編纂、紹介されたものである。なかでも四書五経で採用されたものは三種である。一つは宋人、元人の注釈

による『四書五経』などの中国から輸入し、最近出版したものである。二つは裴輝碧の『五経節要演義』(AB.539/1-12)や黎貴惇の『四書約解』(AB.270/3)といったベトナム人が編纂したものである。三つは漢喃研究所編纂の『四書』と『五経』である。これはファン ヴァン カオイ (PHAM VAN KHOAI) 氏の『孔夫子と論語』、チン レ サン (TRAN LE SANG) 氏の『書経』、チン ケン レ (TRAN HIEN LE) 氏の『老子と道德経』などのように、研究者によって編纂されたものである。

### 3. 漢喃部門での博士課程

ハノイ国家大学の人文社会科学大学における修士課程の教育期間は3年であるが、2010年には学士を対象として教育期間が5年の博士課程を設置することが決定された。ベトナム文部省が社会科学大学の博士課程設置を決定したのは、1993年の漢喃研究院における博士課程の設置や、1980年のハノイ師範大学における博士課程の設置と比較すると、立ち後れてはいるが、40年にわたって学士を養成してきたこと、10年余り修士課程の教育を行ってきたこと、また近年、多くの教育プログラムを開始し、共同して国際的研究にあたってきたことを考慮すれば、当然のことである。また、漢喃学分野が博士課程となったのは、社会科学院と大学、短期大学、全国の歴史遺跡の管理施設に漢喃学の人材を提供するためである。

博士課程の院生は漢喃修士課程の科目を学習する以外に、漢喃学博士号の取得のために7つの科目を学習しなければならない。その科目は文献学、文字学と漢喃文学、関連分野の方法による漢喃遺産の検討、碑文学、前近代から現代までの詮釈学、現在の文化生活における漢喃遺産、東アジア漢文文化圏である。

これらの科目では、東アジア漢文文化圏について日本、中国、韓国、ベトナムの教授にご協力いただき、教えていただいた。実際、2008年から二松学舎大学と大阪大学にご協力していただき、日本の漢文とベトナムの漢文について各大学の教授方や日本学部の院生に漢喃部門の講演をしていただいた。

以上、人文社会科学大学文学部の漢喃学科を中心にベトナムの大学における漢文教育について述べた。前近代から現在までのベトナムにおける漢文教育について理



解していただければ幸いである。漢文教育は伝統時代の漢文教育と大きく異なるが、かけ離れることなく、漢喃学部での授業に過去の精華が現れている。人文社会科学大学における漢文教育は国際関係の発展とともに漢文文化圏や世界との交流によって一層拡大しつつある。

#### 参考資料

1. 『大越史記全書』(Dai Vietsuky toanthu). 内閣官版 (Ban Noicacquanban). 社会科学出版社。ハノイ、1993年。
2. 『歴朝憲章類誌』(Lich trieu hien chuong loai chi). 教育出版会社 (Nha xuất ban Giaoduc)。2008年。『歴朝憲章類誌』によると、1086年から1195年にかけて、不定期ながら6回ほど、「廷試」「太学生試」「三教試」のように科挙試験が行われたが、『大越史記全書』統計によれば、4回の実施にとどまる。(『歴朝憲章類誌』8頁)。
3. 『学校における漢字・喃字学』。社会科学出版社。ハノイ、2008年。
4. DINH KHAC THUAN: 『ベトナムの黎朝における儒学教育と科挙—漢喃文献を中心に』。社会科学出版社。ハノイ、2009年。
5. PHAM VAN KHOAI: 『二十世紀の漢字と課題』。ハノイ国家大学出版社。2001年。
6. NGUYEN THE LONG: 『ベトナムの儒教と科挙教育』。教育出版会社。ハノイ、1995年。
7. NGUYEN QUANG THANG: 『ベトナムの教育と科挙』。第三刷発行。文化・通信出版会社。1998年。
8. NGUYEN HUU MUI: 『ベトナムの奨学に関する碑文の研究』。博士論文。ハンノム研究所。2005年。
9. NGUYEN TUAN THINH: 『10世紀から20世紀至るベトナムの科挙』。博士論文、社会科学・人文大学。1996年。
10. NGUYENTHIOANH: 「漢字・字喃研究院所蔵文献—現状と課題」。特集=東アジア—漢文文化圏を読み直す。文学11、12月号。岩波書店。2005年。PP. 142-157。



写真1 ハノイの文廟（フランス植民地時代）



写真2 ハノイの文廟（現在）



写真3 フェの文廟



写真4 フェの文廟



写真5 フランス植民地時代に成立した周文安学校



写真6 阮辉登『初学指南』

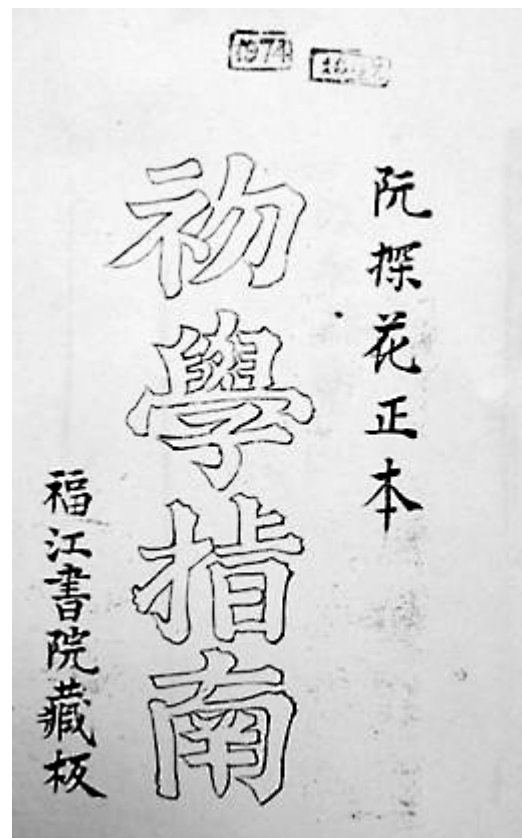






写真7 朱玉芝『啓童説約』



写真8 ハノイ国家大学、人文社会大学